opusdei.org

黙想:無原罪の聖マ リア

黙想のテーマ:「マリアの無原罪の御宿りの教義」「清い生活の美しさ」「信仰、希望、愛徳の生活への招き」

マリアの無原罪の御宿りの教義

清い生活の美しさ

信仰、希望、愛徳の生活への招き

「おおマリア、永遠の光の娘、御子によって総ての汚れを免れた方!

III。今日は、全教会で、聖霊の賜と 実りをことごとく与えられた、サ レのおとめマリアの聖性を褒め称え ます。教会の初めの頃から、キアを 者の著作者たちは、マリアの 告者の著作者たちは、マリアの 生、つまり贖いの御業に特別な 生、つまり贖いの御業に特別な を与されたことを認めていまして、 教皇ピオ九世は、1854年12月8日、 勅書「Inefabilis Deus」を通して、 マリアの無原罪の御宿りの教義を決 定しました。

この文書の中心は、教会の信仰を明確に定義している箇所です。「人類の救い主キリスト・イエスの功績を考慮して、おとめマリアは、全能の神の特別な恩恵と特典によって、全での情があるので、この教義は神からをでいた。この教義は神からを全でいた。このであるので、これを全ての信者は固く信じなければならない」[2]。

ミサの第一朗読は、教皇様が勅書で引用しておられる箇所です。人類最初の祖先が堕罪後、楽園から追放される所です。しかし、それは、希望に満ちた知らせをも含んでいます。 主は、誘惑した悪魔に言います。

「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に、わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き、お前は彼のかかとを砕く」(創世記3·15)。この一節は原福音と呼ばれますが、それは、人類救済の最初の告知だからです。

のはマリアではなく、その御子であることを示しています。しかし、聖書理解は、先祖と子孫の間の深いつながりを確立させます。それゆえ、蛇を踏みつける無原罪のマリアの人との一貫性を持っています。それはマリア自身の力ではなく御子からの恩恵に依るからです」[3]。

ミサの叙唱は、教会の始まりとマリアを結びつける神秘を考えアをのまるとめマリアをの汚れから守り、御子のであるよう恵みで満たし、教会の表に、しないました」は、私の方に思い起こするに、していまいたはいました。 では、しないました。私の時ではいいであるないである教会の時が始まりである教会の時が始まります。 私たちは皆、私たちの母、聖母の聖 性に倣うよう招かれています。しか し、この招きを考えるとき、私たち は次のような疑いを感じるかもしれ ません。つまり「罪をおかさないよ うな人は、実のところ根本的には退 屈で、その人の人生には何かが、つ まり自立した人間の劇的な在り方が 欠けているのではないだろうか | 「51 という思いです。それは正しくない と分かっていながらも、聖母の生活 には見られないように思えるこの緊 張を経験するとき、ある意味、人は 十全な人間になれるのではないかと いう疑いを感じることがあるかもし れません。

「しかし、わたしたちが周りの世界に目を向けるなら、そうではないことが分かります。言い換えると、悪はつねに有害です。悪は人間を高めるどころか、人間をおとしめ、辱しめます。悪は少しも人間を偉大なものにも、清いものにも、富めるもの

にもしません。かえって、悪は人間 を傷つけ、一層つまらないものとす るのです。無原罪の聖母の祭日にあ たって、わたしたちが少しでも学ば なければならないのは、このことで す。神に自分を完全にささげる人 は、神の操り人形になるのでも、素 直なだけの退屈な人になるのでもあ りません。神に自分をゆだねる人 が、自分の自由を失うことはありま せん。自分を神に完全にゆだねた人 だけが、真の自由を見いだします。 善を行う自由のもつ、偉大で創造的 な、はかりしれない大きさを見出す のです | では、要するに、私たちの母 マリアの歩みに倣っている人は本当 の自分自身と出会い、よりたやすく 一人ひとりに近づくことができるよ うになります。それが、神の夢で す。マリアが召し出しを受けた時の ように (ルカ1・26-38) 、今日の福 音で垣間見られることです。またそ れは、一人ひとりのための神のご計 画が、神秘的なものである事をも表

しています。ミサの第二朗読で聖パウロが言っています。「天地創造の前に、神はわたいたちを愛して、ご自分の前で聖なる者、汚れのない者にしようと、キリストにおいてお選びになりました」(エフェソ1・4)。

おられた事を私たちに示して、マリアにおける恩恵の充満を明らかにしています。

私たちも信仰に満たされ、神のみ旨 に沿って生きたいと望んでいます。 私たちは、いつも信仰のうちにとど まり、特に痛みや困難に遭遇したと きは、より熱心に信仰が表れるよう にと願っています。「神は御母を称 賛されましたが、地上におけるご生 活中に信仰の明暗や什事の疲労、苦 痛から聖母を免除されなかったのも 確かな事実ですしい。私たちも希望 をもって生きることを望んでいま す。贖い主の勝利に与っていること を確信しているのですから。使徒た ちが、タボル山でイエスの栄光を見 て、希望を活き活きとさせたよう に、私たちも恩恵の充満を考察する と、人間的に幾らか難しい時を過ご しているときも、私たちの使命に関 して大いに楽観的になります。「難 しい時期には、イエスが私たち皆に

母として与えられたマリアが、私たちの歩みを支え、いつも、〈立ち上がり、前方をご覧なさい、そして視野を広げなさい〉、と心に呼びかけるでしょう。希望の御母なのですから」[8]。

最後に、神と他の人に対する私たちの愛が深まるように、より重まうに、より重要が深まるように頂けるようにはなったが、聖マリアとどもでいる。最善の世で善な実のの世であらしたものが、人々の心を照らしているの光で、人々の行さるでしょう、助けてくださるでしょう。

[1] 聖務日課、無原罪の聖マリアの 祭日、朝の祈り、賛歌。

- [2] ピオ9世、使徒的書簡「Ineffabilis Deus」18番。(カトリック教会文書資料集、2803番)
- [3] 聖ヨハネ・パウロ二世、一般謁 見演説、1996年5月29日。
- [4] 無原罪の聖母マリアの祭日の叙唱。
- [<u>5]</u> ベネディクト十六世、説教、 2005年12月8日。
- [6] 同上。
- [7] 聖ホセマリア『知識の香』172 番。
- [8] フランシスコ、一般謁見演説、 2017年5月10日。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/meditation/mokusou-mugenzai/ (2025/12/13)